キンダーカウンセリングにおける子育て支援：ごっこ遊びを取り入れた2歳児と母親の発達相談

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪樟蔭女子大学 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下温湯, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4426

キンダーカウンセリングにおける子育て支援
―ごっこ遊びを取り入れた 2 歳児と母親の発達相談―

児童教育学部　児童教育学科　下温湯まゆみ

要旨：幼稚園では未就園児（2 歳児）クラスの設置により、キンダーカウンセリングを利用する保護者が増えている。本研究の目的は、母親が子どもの発達を心配し育児のしんどさを訴える事例を取り上げ、カウンセリングの一部にままごとを取り入れた相談の効果について検討することである。カウンセリングは母子同時面接で行い、1 回の事例の内容を①母親の話をよく聴く、②母子の関係を観察する、③子どもと KC が遊び、子どもの発達の様子や気持ちを母親へ伝える、④家庭で実行することが可能な対応について一緒に考える、という面接の流れにそってまとめた。カウンセリング後、母親にとっては育児の孤立感が和らぎ、子ども理解の視点ができ、対応の具体的なヒントが得られた。また、子どもにとっては、遊び体験そのものが発達を促し、わずかな時間でも変容が見られた。しかし、発達に何らかの問題があると考えられる場合は、母親の状況を考慮し、専門機関へつなぐための慎重な対応が必要となる。

キーワード：キンダーカウンセリング、子育て支援、発達相談、未就園児、ごっこ遊び

Ⅰ　キンダーカウンセリングの実際

1　就学前の相談事業とその役割

1995 年に文部科学省がスクールカウンセラー制度の導入を実施して以降、学校現場ではスクールカウンセラー（以下、SC と表記する）の配置が広がり、2018 年度の学校保健統計調査[1]によると、中学校 98.2%、小学校 78.6%、高等学校 88.6%に配置がされている。

保育現場での相談活動の歴史については、三上（2013）[2]が、障害児保育の制度化に伴って 1970 年前後から保育所の巡回指導として広がり、子どもの発達の支援だけでなく、保育者支援・保育の支援のためのコンサルテーションの役割が大きくなっていった経緯について記述している。

幼稚園に関しては、文部科学省（2005）[3]が「幼児教育の充実のための具体的方策として、教員と保護者を支援する保育カウンセラーを導入し、活用しやすくなるような方策を検討する必要がある」と答申を出した。これに先立って、大阪府私立幼稚園連盟は 2003 年から SC 制度に準じたキンダーカウンセラー事業を開始し、現在 100 園以上で実施している。実施は自治体や各園の事情によるところが大きいが、京都府や兵庫県でもキンダーカウンセラー事業が行われている。

キンダーカウンセリングは巡回指導とは異なる特徴がある。ひとつは、継続的な支援ができるということである。キンダーカウンセラー（以下、KC と表記する）と相談者（保育者や保護者）との信頼関係を基盤に、子どもを取り巻く環境や生活の状況を踏まえて、長期にわたる支援をすることができる。また、保護者支援の役割が大きいということが言える。小川（2014）[4]は、KC の事例・実践報告を調査し、KC の役割に対するニーズを捉えようとしている。その中で、「KC の特徴として保育者の支援の重要性が大きく取り上げられ実践されているが、それだけではなく、保護者の直接的な支援が必要となるケースが当初の想定よりも多く見られた」と述べている。大阪府私立幼稚園連盟教育研究部会[5]は、キンダーカウンセリングのねらいについて、「保護者に対して、どう子どもを育てていきたいかを自分で決めていく支えになってほしい」「保育者に対して、集団に向きがちな意識を個々の子どもの視点で捉え直し、視野を広げる援助をしてほしい」「子どもに対して、発達や遊びの様子を把握し、保護者や保育者にアドバイスしてほしい」という 3 点を挙げている。つまり、KC が求められている役割は、保育場面における子どもの見立てを行い、保護者の面接や保育者のコンサルテーションを通して、多面的に重層的に心理教育的支援を行うというものである。中でも、保護者への子育て支援の役割が必要とされている。

2　就園前の相談の増加

(1) 未就園児クラスの設置

文部科学省（2014）[6] は、「幼稚園における集団での学習活動へ円滑に接続できるよう、例えば3歳未満児の段階から親子登園や相談事業等を実施するなどの取組を推進することが適当である」と未就園児とその親子への支援を打ち出している。各園は、未就園児の保護者の育児が孤立しがちな状況であることや園児確保の必要性から、満3歳に達する年度の当初からの幼児の就園事業、つまり2歳児に対する保育事業を行っている。具体的には毎週決まった曜日に登園するシステムが多く、保育の実施回数・保育時間・保育内容は、各園によって異なっている。

(2) 未就園児の相談の状況

未就園児（2歳児）クラスの設置により、その保護者（主に母親）が幼稚園内の掲示やお便りを通してKCの活動を知り、利用するケースが増えている。筆者がKCをしている幼稚園では、相談件数の約15%が未就園児の保護者の利用である。

未就園児の保護者の相談内容は、「ご飯を食べない」「おむつがとれない」「夜泣きがひどい」「自己主張が強く言うことをきかない」などの育児相談と「言葉が出ない」「言葉が聞きとりにくい」「動き回るので外出できない」「他の子と違うと感じる」「健診で引っかかった」などの発達相談である。また、母親自身が「怒ってばかりで関わり方が分からない」「イライラする」「子育てをひとりでしている」など心理的なしんどさを抱えている。2歳児は第一反抗期の時期にあたり、母親が対応に苦慮している様子が伺われる。特に発達相談の場合は、発達に対する不安・心配と育児の困難な状況が複雑に絡んでいる。

このような相談のほとんどは1回で終了する。正式に入園後、発達が心配な場合、あるいは母親の育児不安やストレスが高い場合に、継続して来室となることがある。入園までの孤立しやすい時期に子育ての方向性を得て安心でき、入園後も継続相談ができる場としてKCが活用されている。

(3) 保護者が相談に望むこと

杤原（2011）[7] は、自身のKC相談事例を集計し、「1回で終わるケースが大半を占めるということ、それから相談者の子育てに実際に役立つような助言が必要であるということ、（中略）さらに継続面接を必要とする保護者が全体から見ると少ないながらも一定数存在することが分かった」と述べている。筆者の勤務園の状況が特別なものではないことが分かる。

また、助言が必要ということに関しては、竹中（2007）[8]「カウンセリングと銘打っていても、1回の面接で解決を望んでいることが多い。幼稚園でのカウンセリングは、子育て相談の意味合いが強く、通常のカウンセリングよりも助言の比率が高くなる」、菅野（2004）[9]「親からの依存の問題との兼ね合いになるが、原則に従って非指示的な対応のみに終始するとむしろ不信感を抱いたままの中断になってしまう危険性がある」、現場の安家・邨橋ら（2004）[10] は、「カウンセラーの役割は、自己解決の見通しを持たせることにある。しかし、それでは保護者が満足しないことが多いので、必要最低限の助言をするのがいいようだ」と述べている。キンダーカウンセリングの特徴として、助言が必要であると考える実践者が多い。

まとめると、「キンダーカウンセリングでは、育児に困っていたり発達に関して心配していたりする保護者が、具体的な手立てを助言してほしいと思い来室する」と言える。相談は1回で終わるケースが多く、未就園児の場合は母親が子どもを連れて訪れることが多い。

3　2歳児の発達の理解

2歳児は見知らぬ大人のかかわりにそのままは応じにくいという面接の難しさがある。

2歳児について、神田（1997）[11]「今はどんな場面か、何に向かって行動するのか、2歳になるとそういうことが少しずつ理解されてくる」、木下（2011）[12]「2歳後半には、目の前にいる他者と具体的にやり取りされるが、他者がどのような振る舞いをするのかをあらかじめ表象しながら相互の関係を結べるようになる」、久保田（1993）[13]「2歳半は葛藤を抜け出した先の、横に並んでいろいろのことをいっしょにする世界に行くことができる」と述べている。これらの研究から、2歳児が自己の意識をもち、周囲の他者を組み入れた関係の中で、目的をもって行動しようとし始めている時期であり、表象の力が発達を支えているということが言える。

このような2歳児の発達の様子を踏まえて、キンダーカウンセリングでは、発達上の課題の見極めをすることが重要である。

Ⅱ　研究の目的

相談の機会を母親の育児に活かすために、母子が安

心して思いを表出することができ、母親に子どもの発達の様子や気持ちの動きが分かりやすく伝わるような面接について、事例をもとに検討することが、本研究の目的である。

〔倫理的配慮〕

事例の記載に関しては、幼稚園及び保護者の了解をいただき、プライバシーへの配慮の観点から、本質を損なわないように要約・変更してまとめた。

Ⅲ　研究の方法

1　ごっこ遊び（ままごと）を取り入れた面接

幼稚園児の相談では、KC は保護者の話を丁寧に聴くと同時に、保育中の子どもの様子を実際に見たり時には関わってみたりもし、また保育者からも話を聴くことで、子ども理解を進めていく。そして、保護者や保育者と共に、対応を考えている。

未就園児の場合は、普段の様子を見ることができないので、保護者の話から推察することになる。保護者が子どもを連れてくる場合が多いが、子どもは場所に慣れるにしたがって自発的に動き出すため、親子の関係や子どもの特性を捉えやすい。子どもを理解するためには、遊びを媒介とした関わりが適している。子どもは遊ぶ中で場や他者（KC）への抵抗が少なくなり、日常に近い表現をすることができるようになる。子どもが飽きてしまい、ぐずって相談ができなくなるという状況を回避するためにも、遊びを取り入れた面接は有効ではないかと考える。

遊びの中でも、ごっこ遊びは集団生活で着目される社会性や認知能力や言葉の発達の推測に役立ち、ままごとは 2 歳児が興味をもちやすい遊びである。また、日常的で具体的な遊びのため、母親や保育者に理解しやすいと考えて取り入れた。

2　事例の概要

〔対象〕未就園児クラスに通う 2 歳児とその母親。母親は、子どもの発達に不安を感じ、育児のしんどさを訴えている事例である。本研究では、発達の様相が異なる 3 事例を取り上げる。

〔時間と場所〕1 回 60 分で、幼稚園内の別室で行った。部屋の中心にはローテーブルがあり、コの字型にソファーが置いてある環境である。

3　面接の方法

(1) 母子同時面接

面接の流れは、以下の通りである。

①〔傾聴〕母親の話をよく聴き、主訴や育児の状況、母親の心身の健康を捉える。

②〔親子関係の把握〕母親と子どもの関係を観察する。見知らぬ場所で、初めて KC に会った子どもがどのように振る舞うかは、子ども自身や母子関係を理解するヒントになる。

③〔発達の把握〕子どもに KC が関わって 20 分ほど遊ぶ。母親には、KC〈子どもと少し遊んでみて、子どもが何をしようとしているのか見てみましょう。発達の様子や子どもの気持ちをお伝えできればと思います〉と伝える。母親は、子どもと KC のやりとりを見たり、子どもから求められると遊びに入ったりする。

④〔子ども理解と対応〕子どもへの対応について話し合い、今の母親の状況でできそうなことを考える。

(2) 使用したままごとのおもちゃ

おもちゃをひとつの大きな箱に入れて、子どもの目につきやすいソファーの横に置き、自由に取り出せるようにしておく。おもちゃは、幼稚園の未就園児用の市販のおもちゃを使用した。おもちゃの種類を以下に記す。

〔電化製品など〕　シンク　冷蔵庫　電子レンジ　ガス台　（いずれも小型で、子どもが簡単に持ち運び、テーブルの上に置けるもの）
〔用具・道具〕　鍋　フライパン　包丁　まな板　おたま　皿　コップ　スプーンとフォーク（いずれもプラスチック製の小型のもの）
〔食べ物〕　プラスチック製の野菜、果物、魚、おにぎり、ピザ、ケーキなど子どもがよく知っているもの

4　分析の方法

(1) 分析の内容

①面接記録をもとに、子どもの行動と発達の把握について考察する。

②母親や家庭の状況を総合的にとらえ、母親にとって納得・満足が感じられる内容が提供できたかを検討する。

(2) 発達をとらえる指標

2 歳児の発達を把握するための指標について、吉田（2015）[14] の発達整理の例をもとに項目を作成した。項目は、「母子の関係」「認知・行動の発達」「言葉の発達」「社会性の発達」「母親の子ども理解」の 5 項目である。

項目に当てはまる発達の内容については、以下の文

献を参考にして、ごっこ遊び（ままごと）の場面に想定される内容をまとめた。

・田中昌人・田中杉恵（1984）『子どもの発達と診断 3　幼児期Ⅰ』[15)]
・田中昌人・田中杉恵（1986）『子どもの発達と診断 4　幼児期Ⅱ』[16)]
・津守・稲毛（1961）『乳幼児精神発達診断法　0才～3才まで』[17)]
・生澤・松下・中瀬（2002）『新版Ｋ式発達検査 2001』[18)]

項目 (表記)	内容
母子の関係 (○)	アタッチメントの形式がはっきりしてくる。 子どもの母親に対する態度と母親の応じ方を見る。
認知・行動の発達 (□)	自己の欲求や意思が明確に意識されるようになり、自分の欲することをやり通そうとする傾向が強くなる。 大小・多少・長短に気付き、選択・配置・表現し始める。 丸と四角、赤と白、熱い冷たい、甘い辛いなど知覚の2次元的区別ができ始める。 2数の復唱ができる。(短期記憶の発達) 物の用途が分かる。 意図をもって道具を使い、外の世界に働きかけ始める。 ねじる、曲げるなどの動きができるようになり、ふたを開けたり素材を変形させたりする動作ができるようになる。 素材と道具の関係性に気付いて接触を行う。 象徴的な遊びの段階で、イメージを使ってごっこ遊びのようなことをするようになる(道具のやりとり、ごちそうを作る真似など)。
言葉の発達 (◎)	2語文や3語文の文章を話すようになる。 急激に語彙が増加する。 物の名前が言える。色の名前が分かる。 「いいよ」が言えるようになる。 「こんにちは」「さようなら」「いただきます」「ごちそうさま」が言えるようになる。 「いや」「もっと」「なんで」が言えるようになる。 言葉を用いて、意思の交換をするようになる。 描いたり作ったりして表現したものに、意味をつけ始める。
社会性の発達 (■)	大人のすることを見ていて模倣する。 大人の意思を理解し始め、大人の意思に適応した反応をするようになる。(「ちょうだい」に答えて渡すなど) 大人と一緒の素材や道具を使って、集めたり混ぜたり、切ったり、運んだり、並べたりという手伝いができる。 道具を媒介にふたりでごっこの活動ができる。 欲しいものがあっても、我慢して待とうとするようになる(少し先の見通しができる)。
母親の子ども理解 (◇)	子どもの行動の理解はどうか。 子どもの情緒や意志の理解はどうか。 母親の思いが子どもに伝わっているかの理解はどうか。

Ⅳ　結果（事例のまとめ）

【事例Ａ】　Ａ児（3歳0か月　男児）

①母親の話

【主訴】Ａが他児とうまく遊べるか心配。

父親の帰宅は遅く、Ａと母親の生活である。最近、Ａが母親に強引で依存的な態度がきつくなり、公園では他児におもちゃを貸すことができず、思うようにならないと叩くので、母親は必死で止めている。未就園児クラスでも、他児に対して強引に振る舞っていないか心配している。

②遊びの様子と発達の把握

○母子の関係　□認知・行動　◎言葉
■社会性　◇母親の子ども理解

遊びの様子・子どもの行動	発達の把握
入室後、しばらくMoと共にソファーに座っている。 MoとKCが話し始めると、おもちゃ箱を見つけ、Moに視線を送り、Moが自分を見ているのを確認して、おもちゃを取り出す。 ほしいおもちゃがなくて、KCと一緒に園内に借りに行く。	○Moとの安定した関係 ■適度の緊張感と慣れ □おもちゃの発見と興味 ○社会的参照 ○安全基地のMoと少し離れる
テーブルに電子レンジ、冷蔵庫、大小の皿やコップ、まな板、包丁等を出して並べて置く。電子レンジに皿を入れてはヂンとならすのを楽しむ。大きな皿が入らず、「入らない」とKCに見せる。KCが〈こうすれば入るかな?〉と斜めに傾けて入れると、Aは同じようにする。	□物の捉えと並べる操作 □目的に合った物の操作 □繰り返し楽しむ行為 □大小の把握 ■助けを求める力　◎言語表出 ■関わる人の広がり ■モデリング
鍋にフードを入れてカレー作りをする。味見のまねをして「からーい」とひっくり返る。「キャ	□イメージと再現遊び ■ごっこ遊びの経験

ベツ切ってる。これキャベツだね」とMoに確認する。KC〈おいしそうね〉と言うと、A「お母さんにあげる」とMoに渡し、次にKCにもくれる。KC〈キャベツ好きな人?〉と尋ねると、A「きらーい」。KC〈あら?〉と反応すると、Aはその表情を見ておかしそうに笑う。KCがカレーをさらに載せたのを見て、Aは皿を探し、キャベツを皿に載せてKCにくれる。KC〈A君の分も半分残しておくね〉とわざと言うと、Aは笑って「いいわ」と答える。	◎言語表出・説明・確認 □実物に見立てたおもちゃ ○Moへの信頼 ■人の広がり ◎言葉でのコミュニケーション ■やりとりの楽しさ □生活の中の知識 ■模倣 ◎言葉の微妙なニュアンスの捉え
フードの中からバナナを見つけてすりおろす真似をしながら「(バナナを) ニンジン (にしている)」(家のスライサーの真似)。包丁を使う真似の途中「手を切る」とつぶやく。Mo「鍋でやけどをしたことがあるんです。Moの注意をいろいろ覚えています」と話す。	□生活の中の知識 □延滞模倣 ■他者の視点の理解 ◎自分の行動の説明 □記憶の持続と再現遊び ○Moの考えを取り込む力 ◇過去の体験からの推察

③KCの見立て

【Aについて】認知面は発達しており、物事や他者の行動をよく見て、自分で試して確認することができる。他者の思考や感情を感じとり、応じながら行動することができる。母親と二人の生活から集団生活の学びへの移行の時期である。

【母親について】Aの行動をよく理解している。前の経験と関連づけて成長をとらえることができる。Aが思うように行かない時に母親にぶつけるパワーに、応じきれない状態である。

④KCの助言(KCの発言を〈 〉で表記する。)

KCは、母親と共に遊びの様子を振り返りながら、〈Aは物・人・状況などをよく見て試しており、信頼関係の構築や認知面・社会性の発達が年齢相応なのではないか。母親もAのことをよく見て理解しようとしている。未就園児クラスで他児と関わりながら十分遊ぶことがAの伸びようとしている力を満たし、母親への過度に強引な行動は次第に少なくなるのではないか。未就園児クラスの先生にも園での様子を具体的に話してもらえると母親が安心すると思うので、KCからお願いする〉と話した。

⑤母親より

Aが母親から離れて年上の子どもにおもちゃを借りに行くことができるのだと驚いた。家では母親とばかりいるので意外だった。いろいろと考えて試していることが分かった。Aは未就園児クラスに行きたがらないが、先生方から「幼稚園では楽しそうに遊んでいる」と聞いている。自分の思いを押し通そうとしても、幼稚園では思いのままにはならないと分かったので、未就園児クラスに継続して連れてこようと思う。また、お手伝いを喜んでできる年齢という話を聞いて、母親が何でもしてしまうのではなく、食事の配膳などをさせてみようと思う。

【事例B】 B児(2歳4か月 男児)

①母親の話

【主訴】母親の体調が悪く、育児がしんどく、子どもに対してイライラする。

父親・母親・B・妹(4か月)の4人家族。下の子が離乳食の時期になることを考えるとしんどい。同年齢の子どもをもつ母親たちの話を聞いていると、Bは2歳にしては育てるのが大変でない方なのかと思うが、未就園児クラスに行くのを嫌がり、母親が一緒でないと遊べないので、母親はイライラする。Bは初めての環境に慣れにくく、慣れてくると言葉が出る。父親は家事を手伝うが、Bを叱らず、父方の祖父母も甘やかすので、Bが言うことを聞かない。妹が生まれたことでBのわがままが通らなくなり、気が向くと妹の世話をすることがあるので良かったと思う。

②遊びの様子と発達の把握

○母子の関係 □認知・行動 ◎言葉
■社会性 ◇母親の子ども理解
＊気になる言動に下線

遊びの様子・子どもの行動	発達の把握
入室後、KCと目を合わさず、帽子をかぶりリュックをつけたままますぐに冷蔵庫やレンジを見つけて取り出す。机に並べ始めると、かぶっていた帽子をはずし、Moの方を見ずに差し出す。	■初めての場・他者への緊張感や注意力の不足 □おもちゃの発見と興味 □物の捉えと並べる操作 ○社会的参照の不足
KCがコップに水を注いで飲む真似をすると、Bはじっと見ていて、同じように飲む真似をする。KCが	■他者の行動への興味 ■ふり遊びの理解 ■モデリング

Bに〈コップをちょうだい〉と手を差し出すと、Bは何のこと？という表情でキョトン？とKCを見ている。KCがもう1回〈コップ、ちょうだいね〉と言って、Bの手からコップを取り、飲みまねをして、コップを返す。これをもう1回繰り返すと、BはKCが手を差し出すと手のひらに載せて渡すようになる。	■やりとりの経験不足 ■他者の要求の理解と受け入れ
Bはレンジに次々におもちゃを入れてみる。大きくて入らないおもちゃがあることに気づき、おもちゃを替えて確認する。コップをレンジに入れてチンとし、Moに渡し、Moは受け取る。Bは自分のコップもチンして、飲むまねをする。KCもBに呼応して飲む真似をするが、Bは自分の行為が終わると見ていない。そこで、KC〈おいしいな〉と言いながら見るように促すと、BはKCが飲み終わるのを見るようになる。自分の後に、KCにもコップを渡すようになり、KCが〈おいしい！〉と大きな動作・表情をすると、Bは笑い、何回もKCに渡しては、KCの反応を楽しむ。	□目的に合った物の操作　□大小の把握 □確認行為 □イメージと再現遊び ○遊び対象の母親　◇子どもに応じない ■他者の行動への関心をもたない ■他者の行動への注視 ■人の広がり ■やりとりの楽しさ □繰り返し楽しむ行為
KC〈片付けようか〉とおもちゃ箱を持ってくると、Bは怪訝な表情で首を横に振る。KCがおもちゃ箱にレンジを入れると、Bはレンジを机上に戻して抵抗する。	□状況による理解 ■年齢相応の気持ちの表出
退室時、BはKCやMoのようにスリッパを履いていないことに気づき、Moのスリッパを無理に取ろうとする。KC〈スリッパを履くと危ないよ〉と言うと、Bは取るのを素直にやめて退室する。 園内が気になり日についた場所に行き、帰ろうとしない。	◎言葉の要求が出ない ○母親への働きかけ方 ■関わりをもった他者の受け入れ □興味の移り変わり
玄関で年長児に丸虫を見せてもらう。KC〈外で見せてもらおうか〉と誘うと、Bはすぐに靴を履く。KCは母親に子どもの特性や丸虫への興味を説明すると、Mo「そうなんですか」と言うが、関心を示さない。	□年齢に合った興味関心　□状況の理解 ■納得による素直な行動 ◇子どもの興味に関心が薄い

③KCの見立て

【Bについて】母親を頼りにして行動している。Bの言動に対する母親の注目や働きかけが弱い。Bは周囲から得る知識の不足や人とのやりとりの経験不足で、年齢よりも幼い。Bに少し働きかけをすると、Bは他者に興味を示して受け入れようとし、遊びの楽しさを感じることができる。

【母親について】二人の子どもの育児に大変疲れており、動作や思考が緩慢である。Bが表現していても気づかず、Bの言動を受け入れられない。言葉の遅れや幼さについて、気付いていない。

④KCの助言（KCの発言を〈　〉で表記する。）

KCは遊びの様子を振り返りながら、〈Bはやりとりを重ねると要求されていることが理解でき、遊びを楽しむ力がある。しかし、まだ幼く、母親の存在を頼りにその場にいることができたり、大人の行動を真似してみて行動したりする年齢である。言葉の発達は、大人が話しかける言葉やその時の状況から学んで、使えるようになっていくので、話しかけることが必要だが、もし方法が分からない時には、未就園児クラスの先生に教えてもらって、同じやり方をしてみるとよい〉と伝えた。〈母親は、幼い2人の子どもの子育てで、今が一番大変な時。今日は頑張って相談に来られたと思う。しんどい時には、一人で育児をしようと思わず、保健師への相談・保育所の一時預かりの利用・未就園児クラスの利用を増やすなど、子どもを預ける方法がある〉と話し、子育て支援施設のパンフレットを渡した。

⑤母親より

まだ手がかかる年齢と思いながらも、Bには早く家事ができるようになってほしいと思ってしまう。自分に余裕がなく、なかなかかまってやれない。

母親の話に対してKCは、〈母親が疲れてしまっているので、まずは母親が少し楽になる方法を考えて、食事や離乳食は市販のものや宅配サービスなどを利用してよいのではないか〉と伝えた。

【事例C】　C児（2歳6か月　男児）

①母親の話

【主訴】言葉が出ない。ご飯を食べない・寝ない・夜泣きがあるなど、困っている。

父親・母親・Cの3人家族。2週間後に第2子を出産予定。Cの言葉が出ないので、保健所に定期的に呼

ばれる。未就園児クラスの先生には、「C の言葉が聞きとれない」と言われた。離乳食の時は食べなかったので、テレビを見せている間に母親が C の口に入れていた。今ではテレビがついていないと泣き叫ぶ。静かにさせるために菓子やスマートフォンを与えている。C が言うことを聞かないと、きつく怒ってしまう。昼寝をしないので、保育所は午前中しか預けられない。遊具やおもちゃで遊べず飽きてしまい、大人が相手をしようとしても応じない。

②遊びの様子と発達の把握

○母子の関係　□認知・行動　◎言葉
■社会性　◇母親の子ども理解
＊気になる言動に下線

遊びの様子・子どもの行動	発達の把握
入室してすぐにCはソファーを飛び跳ねるので、Mo が怖い表情で止めると、C は Mo を叩いたり噛んだりする。	○Mo とのアンビバレントな関係
入室時にウォータークーラーを見つけたCはMo に「(み) ず」と要求する。Mo が水を入れに行く。C は何回も「ず」と要求し、その度に Mo は入れに行く。C は「チョコ」と言いながらMo のカバンを開けて取り出そうとする。Mo「あげない」とふたを閉めると、C はぐずる。Mo が「おっちんして」と言うと、C は食べている間は座っている。C は Mo のカバンからスマートフォンを取り出して操作し、ゲームの画面を開けて遊び始める。Mo「スマホの使い方は分かっていると思います」。	◎言葉の遅れ ○Mo とのアンビバレントな関係 ◇子どもの行為の制御ができない ○Mo とのアンビバレントな関係 ◇育児の不適切な方法
KC がおもちゃ箱を取りに行くと、C はおもちゃを取り出す。レンジを見つけて、ふたを開けたり閉めたりする。 すぐに棚の上の犬のぬいぐるみを見つけて「ワンワン」。ソファーをつたって棚によじ登って取ろうとするので、KC が取る。KC から犬を受け取り、自分に背を向けて置き、ぬいぐるみでは遊ばず部屋を動き回る。	■他者の行為への反応 □感覚的な操作（遊び目的のもちにくさ） □集中の続きにくさ ◎言語表出の幼さ ■他者を入れない（助け・許可を求めない）強引な行為 ■交流のもちにくさ □おもちゃとしての扱いの不十分さ
おもちゃの中からフードを見つけて Mo に渡す。コップを Mo に渡す。Mo は食べまねをする。C は嬉しそうに見て、Mo と同じように食べまねをする。 その後、おもちゃでは遊ばず、動き回る。 窓から園庭が見えると、窓のカギを外してベランダへ出ようとする。鍵の外し方を知っている。	■他者への働きかけ ○Mo が応じることへのうれしさ ■行動の模倣 □おもちゃとしての扱いの不十分さ ■他者を入れない（助け・許可を求めない）強引な行為 ◇子どもの行為の制御ができない
玄関で、C はバギーに乗る。Mo がベルトを留めると、C が怒る。Mo がベルトを外すと、C は自分でベルトを留めて納得する。	■こだわり行動・決められた行動パターン・他者の行為の受け入れにくさ

③KC の見立て

【C について】社会性や認知の発達の問題や特性があり、母親にとっては乳児期から育てにくい子どもであったことが推測される。

【母親について】C を何とか育てようとしているが、気持ちの余裕がなく、その場を収める行動をしてすませてしまう。出産間近で、社会的資源を得るための行動がとりにくい。

④KC の助言（KC の発言を〈 〉で表記する。）

KC は遊びの様子を振り返りながら、2 歳児の興味の示し方や遊び方、大人とのやりとりについて説明し、C の発達の様子が気になることを告げた。母親の関わりの問題ではなく、育てにくい子どもだったのではないかと話した。また、〈保健所の言葉の発達相談には続けて通い心理士にみてもらってほしい。第 2 子の健診の時には C も連れて行き保健師に育児相談をするとよい。未就園児クラスの先生や園長先生にいつでも相談できるように KC から伝えておく。母親ひとりで大変であれば祖父母も一緒に KC に相談ができる〉ということを提案した。

⑤母親より

祖父母がしばらく手伝ってくれると言うので、お願いしようと思う。父親にも今日の話を伝えてみようと思うが、分かってくれるかどうかは分からない。未就園児クラスや言葉の相談は続けようと思う。

母親の話に対して、KC は〈今は母親の体調に気を

つけて、無事に出産することが大事。C を祖父母に預けられると安心できる。母親が出産後に落ち着いてからでいいので、自治体の発達相談に行くと、C のことをよく見てもらえる〉と話し、帰る時に園長先生を紹介した。

Ⅴ　考察及び今後の課題

1　ごっこ遊びの効果

ごっこ遊びは、子どもも親も経験したことがあり、活動が分かりやすく安心感がある遊びである。そのため、KC と子どもの関わりのきっかけになり、発達に大きな課題がなければ、大人も子どもも楽しむことができ、場の雰囲気が和む。遊びの中から、知的な能力・人間関係・言葉の発達など、発達を主要な視点で見ることができる。特に、人とのやりとりの方法やイメージの持ち方について捉えやすい。また、人間関係が形成され、子どもに環境を取り入れようとする態度がみられるので、短時間でも子どもの変化が感じられ、限りある時間を有効に使うことができる。

2　母親にとっての面接の意義

事例 ABC は、母親がひとりで育児を担っており、子どもと二人きりの生活にしんどさを感じている。相談の機会を母親の良好な育児に活かすためには、まず、母親が「大変さを分かってもらえた」と感じることが、母親の心の支えとなる。幼い子どもを連れて訪れることは大変な労力が必要であるが、身近に相談できる人がいない不安が相談を望む行動にあらわれているためである。そのため、KC は母親を労いしんどさを受けとめて共に考えようとする姿勢で話を聴いている。事例はクライエントが自分を見つめ気づき考えるという本来のカウンセリング過程まではいかない。しかし、母親の張りつめていた気持ちがゆるみ、普段は感じることが少ない安心感をもつためには、やはりカウンセリングの基本である傾聴・受容・共感の姿勢が面接を支える基盤であると考える。

次に、母親が「子どもを理解する」と、子どもや困りごとを客観的に見ようとする視点ができ、子どもへの関わりが変容すると考える。芹澤ら（2008）[19] は幼稚園の巡回相談に重視される機能について分析し、「（巡回で観察する）対象児理解は、他の支援機能に先立つ支援機能であることが見出された」と述べている。この研究は、保育者に対しての支援について述べられているが、母親の支援についても同様のことが言えるだろう。母親が子どもを連れてくる理由には、子どもを直接見てほしいという思いがある。そこで、母親に見える形で―本研究の場合は、家庭でもよくされているままごとを取り上げて―子どもの思いや発達の具体的な様子を伝えることができれば、母親が子どもを理解し、子どもへのよい感情を抱いて前向きな育児につながると考えた。母親の中には、子どもとの接し方が分からないと訴える場合があるため、一般的な遊び方を知り、家庭での遊びに役立てることもできる。事例 A では、母親が子どもの行為に理由や意味があることが分かると、ひとまずは子どもの遊ぶ機会を確保しようと考えるようになった。育児の困りごとは子どもの発達段階に由来していることが多いので、母親が子どもを理解できると、子どもの多くは発達に伴っていずれは問題が解決していくという見通しをもつことができる。

最終的には、「具体的な関わりのヒントが得られて実行できる」ということが、日々困っている母親を力づける。母親によって育児環境が異なるので、KC が一般的な対処法を伝えるのではなく、実行可能な試みを一緒に考え、何から始められそうかを母親自身が決めることで、母親の主体性がうまれると考える。事例 C のように、子どもの要求のままにおやつを与えたり、スマートフォンに子守りをさせたりすることは望ましくはない。しかし、子どもの言動を収めるための別の方法が見つけにくい状況であった。祖父母に手助けしてもらうという母親が選んだ方法は、母親の理解者を増やすためにも、子どもへの関わりを改めて考えるためにも良い方法と言える。

3　子どもにとっての面接の意義

相談では、子どもが「他者と関わって遊んで楽しかった」「自分がやろうとしていることが分かってもらえた」という感覚を味わってほしいと筆者は考えている。KC は遊びを通して発達のアセスメントを行うが、子どもにとっては遊び体験そのものが子どもの発達を促している。弘中（2000）[20] は、遊戯療法の中の遊びの機能について、「遊びは表現であり、しかも表現すること自体が意味のある体験を引き起こしている」と述べている。また、村瀬（1996）[21] は、遊びの多面性について、現実をマスターしていく力を育成する、コミュニケーションの道具で遊びを通じて人と人との絆を信じ得る、遊びを通じて知見や知識・技術などを会得することができる、遊びによって精神的なエネルギーを蓄積するなどを挙げている。事例 A では、子どもが

母親に対して自分でコントロールできない気持ちをぶつけるが、遊びの中では知性を働かせて健康的に行動している。事例Bでは、他者（KCや母親）を視野に入れようとしない単独の行動から、他者（KC）の考えを受け入れて応じようとする態度への変容がみられる。わずかな時間の交流でも遊びが発展して気持ちのやりとりが進んでいくと、子どもの発達が感じられる。2歳児は警戒心が強いが、一度興味をもつと気持ちの切り替えが早く動き始めるようになる。KCは、子どもが安心感をもって自己表出できるような雰囲気作りをして、子どもから遊びを発見するように環境を工夫すると、子どもを自発的に遊びへと誘うことができる。

4　未就園児の相談におけるKCの役割

在園児の相談は、子どもが在籍している間、継続して相談に来たり、子どもの発達を確認したりすることができる。しかし、未就園児とその保護者は、そのまま入園する場合もあれば、他園に入園する場合もある。

そのため、未就園児の相談の場合、必要があれば専門機関につなぐことが必要である。事例Cは発達に心配があったため、この機会を早期対応に活かせるように、働きかけをした。KCが関与しながらの見立ては厳密なものではないので、その限界を心得て、発達等の専門機関へつなぐ選択が必要である。

また、保護者にとって、カウンセリングが困った時の方略の1つとなるような体験にすることも大切なことである。たとえ1回の相談であっても、相談は鮮明に記憶されているものである。KCとの間に良い感情交流ができ、KCの専門性が実感でき、カウンセリングに良いイメージをもつことができると、今後困ったり悩んだりした時の援助を求める行動へつながると考える。

5　今後の課題

遊びを取り入れた相談は発達検査ではないため、厳密なマニュアルがある訳ではなく、子どもの動きに応じながら展開するのでマニュアル化するものでもない。通常のプレイセラピーのように遊びの選択肢は少ないが、提案された遊びという枠組みの中での自由度は高い。つまり、条件が統制された発達検査とクライエントの表現を重視するプレイセラピーの中間的な位置にあると言える。

面接の自由度を維持しながら、しかし、遊びを発達の手がかりとするためには、遊びにおける発達の指標を検証して、正確なものとしていく必要がある。異なるKCでも判断基準が同じかを確認して、研鑽を積むことが必要である。限られた時間と空間の中で発達が分かりやすい遊びは、ままごと以外にも考えることができ、遊びによって子どもの異なる面が見えることが推察される。取り上げる遊びから子どもの何が分かり、子どもが何を経験できるのかを捉え、遊びによって発達の指標を作る必要がある。また、KCには、子どもの言動の特性や発達に関する知識、遊ぶ技術が必要となる。

相談は、母親が自分の話をよく聴いてほしい場合、子どもの発達を見てほしくて連れてくる場合、子どもの発達を知るために遊びをKCから提案するのがよい場合など様々である。それぞれ求められていることに応えることが大切である。事例Bは、母親の関わり方で、子どもの発達が促される可能性が高いとKCは判断をした。しかし、母親は気持ちの余裕がないと訴えているので、母親の話を聴くことに専念する方が母親は満足したかもしれない。母親が受け入れることができる内容を吟味して伝えることが必要で、母親の気持ちの充足と子どもの発達のどちらを優先するのが良いかは葛藤するところである。事例の経過をたどり、知見を積む必要がある。

文献

1）学校保健統計調査2018年度
2）三上岳（2012）障害児保育における巡回指導の歴史と今後の課題　京都橘大学研究紀要　第39号　206－185
3）文部科学省中央教育審議会（2005）子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）
4）小川恭子（2014）キンダーカウンセラー活動の現状－研究動向と今後の課題について－　花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要　第8号　41－49
5）大阪府私立幼稚園連盟教育研究委員会（2017）キンダーカウンセラー事業について（カウンセラー対象）研修会レジュメ
6）前掲　子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）
7）杤原京子（2011）キンダーカウンセリングにおける保護者面接についての一考察－母親の個別相談の実態から支援の在り方を考える－　近畿大学臨床心理センター紀要　第4号　45－57
8）竹中美香（2007）幼稚園におけるキンダーカウ

ンセラーの役割についての一考察　東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要　第4号　87－90
9）菅野信夫（2004）幼稚園における子育て支援－キンダーカウンセラーの活動－　臨床心理学　第4巻第5号　600－605
10）安家周一・邨橋雅広・菅野信夫・辻河優（2004）大阪府私立幼稚園連盟におけるキンダーカウンセリング事業の利用効果　日本保育学会第57回大会発表論文集　676－677
11）神田英雄（1997）0歳から3歳　保育・子育てと発達研究をむすぶ（乳児編）ちいさいなかま社
12）木下孝司（2011）ゆれ動く2歳児の心　木下孝司・加用文男・加藤義信（編著）子どもの心的世界のゆらぎと発達　表象発達をめぐる不思議　ミネルヴァ書房　pp 37－63
13）久保田正人（1993）二歳半という年齢　認知・社会性・ことばの発達　新曜社
14）吉田弘道（2015）第3章　子どもの心の発達　滝口俊子（編著）子育て支援のための保育カウンセリング　ミネルヴァ書房　pp 41－59
15）田中昌人・田中杉恵（1984）子どもの発達と診断3　幼児期Ⅰ　大月書店
16）田中昌人・田中杉恵（1986）子どもの発達と診断4　幼児期Ⅱ　大月書店
17）津守真・稲毛教子（1961）乳幼児精神発達診断法　0才～3才まで　大日本図書
18）生澤雅夫・松下裕・中瀬惇（編著）（2002）新版K式発達検査2001
19）芹澤清音・浜谷直人・田中浩司（2008）幼稚園への巡回相談による支援の機能と構造：X市における発達臨床コンサルテーションの分析　発達心理学研究　第19巻　第3号　252－263
20）弘中正美（2000）第2章　遊びの治療的機能について　日本遊戯療法研究会（編）遊戯療法の研究　誠信書房　pp 17－31
21）村瀬嘉代子（1996）子どもの心に出会うとき－心理療法の背景と技法－　金剛出版

Child Care Support by the Kindergarten Counselor: Developmental Support for Children before Entering Kindergarten through Playing House

Faculty of Childhood Education, Department of Childhood Education
Mayumi SHIMONURI

Abstract

The present study investigated the effects of developmental support through playing house with the kindergarten counselor. The participants of this study are three children for whom the mother was worried about their development, and she was very tired from caring for her child.

The mother and her child received counseling together. The processes of counseling were 1）listening to the mother speak, 2）observing their relationship, 3）playing with the child and telling the mother his opinions, and 4）considering measures together.

From this study, the following two points were extracted. First, the mother's heart lightened, and she was able to understand her child, allowing her to come up with a good idea for her child care. Second, the child developed communication and recognition skills gradually from playing house. However, the kindergarten counselor needs to carefully treat cases that include developmental disorders, while showing consideration for the mother's feelings. This gives the mother and her child a sense of security while providing an attitude of listening, acceptance, and empathy by the kindergarten counselor.

Keywords: Kindergarten Counseling, Child Care Support, Developmental Support, Pre−Kindergarten Children, Playing House